2023年11月5日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

けんかをしない神様

［イザヤ書42章1節～9節］

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ／彼は国々の裁きを導き出す。  
 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。  
 傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする。  
 暗くなることも、傷つき果てることもない／この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。  
 主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ／地とそこに生ずるものを繰り広げ／その上に住む人々に息を与え／そこを歩く者に霊を与えられる。  
 主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼び／あなたの手を取った。民の契約、諸国の光として／あなたを形づくり、あなたを立てた。  
 見ることのできない目を開き／捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出すために。  
 わたしは主、これがわたしの名。わたしは栄光をほかの神に渡さず／わたしの栄誉を偶像に与えることはしない。  
 見よ、初めのことは成就した。新しいことをわたしは告げよう。それが芽生えてくる前に／わたしはあなたたちにそれを聞かせよう。

[1]　神様は「さばく」だけの方？

その親がいわゆる新（興）宗教の熱心な信仰者で、子供も半強制的に信仰を押し付けられて来た、いわゆる「宗教2世」と呼ばれる人々の、ひとには言えない深い悩みというものがクローズアップされるようになってきました。先日もNHKでドキュメンタリーやドラマでそれが描かれていました。本当に大きな問題で、これはキリスト教会であっても、起こり得ることとして捉えていく必要があることだと思いました。例えば「そのようなことになったら地獄に行く」とか「神様は不信仰なあなたをさばく」といったように、深い不安や恐怖を与えることが起こり得るということです。皆さんはそれをどのようにお思いになりますか？神様というお方は、本当に、そのような“基準”に沿わない者を容赦なく裁く方なのでしょうか？そしてそんな“基準”を守っていくということが信仰生活なのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。もしもそんなようなメッセージを聞いたら、それは聖書の告げている神様とは違う、と捉えて下さい。

聖書で、「神」は、創世記の初めから記されているように、天地創造の神、また人を創造し、またその人間の歴史を導いておられる神様です。間違ってはいけないと思うのは、神様は、この世界を「支え、導いて」おられるのですね。いたずらに裁くというお方ではありません。あのノアの洪水の時も、確かに洪水は審きの出来事である、と同時に、人間の歴史・営みが続いて行くための救いの方舟がそこに用意されていた、ということですよね。「出エジプト記」の物語も正にそうです。神様は歴史に働かれて（旧約はイスラエルの歴史ですが）、辛い試練の中も通過させる（審き）と共に、この民と共に歩み、正に脱出（＝救い）の道も与えておられます。神様は、ご自分が造られた者を決して見離される方ではありません。主は憐みのあるお方です。

今日ご一緒に開いているイザヤ書の42章もそうです。この時代、旧約のイスラエルの民にとって、“バビロン捕囚”という、ある意味絶望的・屈辱的な試練の中も通らせられましたが、神様の約束が消えてしまった訳ではありません。むしろ神様のご支配の中で、ペルシアの王キュロスが現れ、故郷から捕囚の身になっていたユダヤ人たちの解放が語られています。そしてそれは、ただの政治的・この世的な解放の事柄だけではなくて、むしろ、新しく神様と出会い直す、ということでもありました。イザヤ42章の初めの部分は「主の僕の召命」という小見出しが付いています。そうなのです。この一人の「主の僕」と呼ばれる存在が出、彼の中に、新しい時代の神様のみ心（不信仰な者たちにも神の救いが及ぼされること）が現れていることを知らせるのです。特に大切なのは42:3～4節です。この主の僕というのはどういう者なのか。―「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。 傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする。」

私たちは、神様は“力を振るう存在”だと考えやすいと思います。しかし、ここでは正反対のことを語っていますね。「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない」。威嚇しないのです。信仰を強制する親のように押し付けない。それどころか、次にこのように語っています。「傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく…」と。葦は、傷みやすい植物です。私たちは葦のようだけれども、主の僕はその傷つき、打ちひしがれる私たちに寄り添って下さる。また、油を湿らせ火を灯すランプの灯心が暗くなっていくように、私たちの心の光が消えかかっていてもそれを吹き消すなんていうことはしない。か細い光であってもその光がまた確かな命に繋がれ、明るくなって行くように見守り導いて下さる、神様はそのように私たちに親しく接して下さるのです。続く5節にはこうあります。「主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ／地とそこに生ずるものを繰り広げ／その上に住む人々に息を与え／そこを歩く者に霊を与えられる。  
 天地創造のスケールの大きな神様が、私たち一人ひとりに目を留め、新しく息を与え、霊を与えられると言うのです。これは正に主イエス・キリストが私たちにして下さったことであると思いますし、また、「そこを歩く者に霊を与えられる」とあるように、「聖霊」が注がれるということだと思います。  
  
[2] 主があなたの手を

　今日は礼拝の中で「主の晩餐式」も執り行います。先日、ルカによる福音書の中の「主の晩餐」の記事を読んでいたのですが、今まであまり気に留めていなかった出来事に心が留まりました。それは、あの晩餐の席、食事の最中に、弟子たちはけんかのようなことをしているのですね。ルカ22章19節以下このように記されています。「それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおり去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。」

　私たちはこの晩餐の席がどんなに厳粛な時であるか知っています。主イエス様がパンと杯を配り終わったその中で一体弟子たちは何をやっているのかと思います。「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」と言い争っているのです。しかし立ち止まって考えてみました。ああ、これは自分のことだなぁと思います。私たちは皆どこかで「力」ある者とみられたいのです。「優劣」という価値基準です。神様から見たら、皆どんぐりの背比べと言うか、目くそ鼻くそを笑う、といったことだと思うのですが、この世的な評価、評判といったものに人間は縛られてしまっているのではないでしょうか？「だれがいちばん偉いだろうか」。逆に言うならば、心の中で他者を裁いているのです。心の内で人間同士、叩き合っているのです。12弟子は、言ってみれば主にお墨付きをもらいたい、力ある存在に認めてもらい、その分、他者を叩く。私たちも同じではないかと思います。一皮剝けば自分の内側は、人に見せられない汚れたもの不潔なもので一杯です。…でもだからこそ、主のパンと杯がその只中にある、ということの重要性、また恵み・憐みを思います。こんな私（たち）だからこそ、主は晩餐式を制定し、その翌日、十字架におかかかりになったのだと。ですからイエス様はこのあとでこう言われました。「そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」（25-26）。イエス様は、弟子たちに対してもこのようになさったのです。―「傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする」。イエス様の愛は、私たちを知り尽くす愛、そして私たちを新しく造りかえる愛です。この世の「力」に傾斜し、転がって行く私たちを裁くことなく、むしろ大きな愛で受け止め、赦す。…「十字架」とは、人間を裁かず、むしろご自分を差し出された赦しの御腕そのものです。人間は「だれが偉いのか」とけんかをしますが、主は人を裁くけんかをせず、ご自分を与え尽くしておられるのです。

イザヤ書に戻りますが、イザヤ42：6節の言葉はいいですね。「主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼び／あなたの手を取った。民の契約、諸国の光として／あなたを形づくり、あなたを立てた」。これは主の僕への言葉でありと共に、私たちへの言葉でもあると思います。私が小学生の時に、親戚旅行で、確か草津白根山に行ったのですが、私はいつの間にか、あの巨大なお釜のふちの所を喜んで歩いていたのです。下は火山が作った巨大な池です。その時、父が走り寄って私の手を取って引っ張ってくれました。「そっちに行くな。危ない！」父の方が慌てふためいて…。私たちがどこを歩いているのかわからない時に、主が「恵みを持ってあなたを呼び、あなたの手を取って下さった」のですね。それが十字架ではないでしょうか。そんなにも主は近く、その主の手は温かいのです。神様は私たちを捨てるどころか抱いて下さるお方です。感謝致します。お祈り致します。

主よ、愚かな私です。自分が何者なのか分からずに偉ぶり、あなたを退け、周りと比べたがる罪人です。そんな私たちにあなたは今日も十字架の愛で迫ってきて下さいます。私たちを傷ついた葦、暗くなってゆく灯心として愛し、寄り添って下さいます。主よ、どうか高慢な私たちをあなたの愛で造りかえて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。